1

世界が――少しずつ歪み始めた。
勿論天は天のままであり地は地のままであるのだけれど、蒼穹はほんの僅か燻み、碧海はほんの僅か澱み、翠層はほんの僅か滲み始めている。
誰にも――判るまい。
少しずつ――少しずつ。
目に見えぬ程少しずつ。
緩緩と狂って行くのだ。
やがて宇内の箍は外れ底は抜けて、個人――国家と云う古びた樽は解体しよう。
そして世界は真実の姿を取戻す。これは混沌を経て太極へと至る、抗い難い道筋である。
已むを得ぬことである。
元元、世界はひとつしかないのだから。
世界が人の数だけあるが如き、悍しき異相が罷り通る時代など本来的に間違っている。

間違いは正すべきと知れ。
否――。
黙して居ても正されるものである。
上古の大型爬虫類が地上から駆逐されたが如く。
だから――。
騒ぐことはない。
煽ることもない。
壊れるものは壊れよう。徒に劇的な変革を求めるは愚か者の所業である。
所詮人の手だけで世界は動かぬ。
革命の二文字を歴史書は数多記しているが、変わるべくして変わったものを恰も人の手で変えたが如くに勘違いをしているだけのことである。ただ、がたがた云わせるだけならば寧ろ動かさぬ方が好い。天命を改めるが如く豪語したところで、世の中が変わった例はなし。
世界はただなるようになるだけである。
堰き止めようが流れを変えようが、水は常に高きから低きに流るる。天然自然の理に悖らって物ごとの成る道理はない。
異相は自然淘汰される運命にある。
ならば不自然な方向にどれだけ力をかけても結果は無為であろう。

反動が起くるが如き力の用い方は賢い遣り方とは云えまい。重圧(プレッシャー)をかけた分だけ、必ず同じ大きさの抵抗が返る。

強引に推し進めれば推し進める程に、是正せんと云う力も同じだけ働く。右に揺れ左に揺れて結局は収まるところに収まるだけのことである。常に反革命を内包した革命など、殆(ほとん)ど意味を持たぬのだ。

功(こう)を焦(あせ)って急(せ)いてはならぬ。

居丈高(いたけだか)に構えるのも無駄だ。

要らぬ力を込めてはならぬ。

我我の住む世界は元来傾いている。

だからほんの一寸押すだけで好い。

何も大きく歪(ゆが)める必要はないのだ。

傾いた方に、少しだけ押せば済む。

異相の穢土(えど)など何処(どこ)かで歪(いび)つに組み上がっているものなのだ。構造的に欠陥のあるものは外的作用を及ぼさずとも自重で潰れるものである。僅かに傾いたその方向に、指先で軽く押してやれば好い。

それだけで好いのだ。

たったそれだけのことで穢土はいずれ一掃され、浄土が到来する。

簡単なことだ。

悠寛(ゆったり)と、時をかけて――。

真綿(まわた)で頸(くび)を締めるが如く。

じわじわと。

少しずつ――少しずつ。

目に見えぬ程少しずつ。

緩緩(ゆるゆる)と狂え。

そしてまやかしの世界は崩れ去る。

気付いた時にはもう遅い。止めることなど出来はしないのだ。

舞え歌え、愚かなる異形(いぎょう)の世の民よ。

浄土の到来を祝う宴は、

――さぞや愉(たの)しいことだろう。

＊

天を――丸いと思ったことはない。

窓枠越しに四角く抜けた、白い虚空を眺め乍ら、村上貫一はそんなことを考えていた。

何故お空は丸いの――。

そう尋かれたのは、果たして何年前のことだったのだろうか。それは多分、貫一が復員して来てすぐのことなのだ。ならば五年前か。六年になるか。

――六年も経つか。

うんと一声唸って、貫一は仰向けになり、天井を見上げた。黒く陽に灼けた煤けた天井板には、木目や節や埃や染みが有機的な模様を描いている。

貫一は、暫しその複雑な絵面に見蕩れた。

――六年か。

壁に目を転じる。薄汚れている。燻んでいる。借りたばかりの頃はこんな色ではなかったようにも思う。しかし、一方で最初からこうだったような気もする。どうにも記憶が定かでない。どこがどう変わっているのか、具体的なことは何ひとつ判らない。どうあれ、天井の模様も煤けた壁も、貫一の眼にはやけに新鮮に映った。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。